

# 安楽の至徳を示す

——入出二門の源泉——

安 田 理 深

五種の不思議ということ、突然のようですが「五には仏法不思議」と出してあります。偈文ですので、五種の不思議をなるべく簡単に言う、「五には仏法不思議」である、という意味があります。突然のようですが、実はここに五種の不思議を開いて、特に仏法の場合の不思議をあきらかにする。その仏法不思議という意味で浄土の不思議がある。つまり、浄土の不思議は仏法の本不思議であるということです。これは曇鸞大師が『智度論』を通して解釈されたことです。親鸞は曇鸞大師が注意されたことで自分も注意することができたとあらわしているのです。五種の不思議には、他に衆生多少不思議とか、業力不思議というものがありません。業力不思議とは宿業の力というもの不思議です。それから龍力不思議です。

衆生多少不思議とは衆生がどんどん死んでゆくけれども、またどんどん生まれてくる。計算したわけではないけれど、そこで平均を保って、現にそうなっている。そういうことが不思議だということです。戦争や病気など、いろいろなことで減っていくようにだけ、変わりつつもそこに衆生界というものが成り立っているということがあります。この衆生ということ、さらには内面化すれば業です。業によって衆生ができています。そういう業力不思議ということがあります。龍力不思議とは、龍は衆生に違いない。しかし、インドでは龍樹菩薩に龍という字があるように、

ナーガは非常に尊敬されています。龍を神聖化して見るのです。龍力とは自然界のこと。自然界にはいろいろな不思議なことがあります。雨が降るといふこともそうです。雨が降ってくるという自然現象が、非常に不思議であるといふことです。それから禪定力不思議。これは精神界のことです。精神界の不思議。龍力の方は自然界の不思議。それに対して禪定力は禪定の世界ですから精神界の不思議です。そういう不思議です。しかし、それはやはり一つの世間なのでしよう。禪定の世界といつても、それは世間です。色界とか無色界というのが禪定の世界で、欲界ではないけれども、やはり世間です。

それに対して、第五は仏法力不思議。これは全く出世間の不思議です。そういう種々の不思議についてバラバラに説かれている。『論註』ではそれを五種にまとめてある。その意図は仏法の不思議を、仏法ではない不思議と區別するためです。いまし話ししたことからもわかるように、仏法ではない不思議はわからないから不思議であるという意味ですね。わかれば不思議ではない。わからないから不思議であるということです。そのわからないということにも、さらに何か神秘的という意味があるでしょう。つまり、神秘的な龍のようなもの、さらに加えるならば奇跡という意味ですね。奇跡的な不思議です。そういうふうに着目して見ると常識に驚きを与えるような不思議です。そういうものがあるのだと思います。それに対して仏法は、そういうわからない神秘的、奇跡的という意味の不思議ではないのです。当たり前のことを不思議といふのです。日常的、あるいは平常的なことが不思議なのです。我々が当たり前と思つてゐることが実は不思議なのです。当たり前だと思つてゐることが実は当たり前ではないのだ。こういう意味で不思議といふのです。当たり前、平常である、といふのは道理のことです。道理の不思議です。因縁の道理といふことです。

浄土の莊嚴とは「第一義諦 妙境界相」とあります。「第一義諦」とは何であるかといふと因縁である。我々が平常と思つてゐる世界が因縁によつて成り立つてゐる。龍力や神秘的な力で成り立つてゐるのではなく、因縁によつて成

り立っているということです。因縁ということが不思議なのです。作るものなくして作られ、動かすものなくして動かす。こういうことを不思議であるというのでしょうか。「第一義諦 妙境界相」。龍樹菩薩は第一義諦とは諸仏因縁の法であると解釈している。これは『中論』に出る言葉です。因縁とは我々の道理ではありません。我々の頭で理解できるのは自然科学というものです。そういう自然科学があれば、龍力不思議のような不思議は消えてしまうのでしょうか。しかし、因縁は、理論ではなく、覚られた道理です。だから諸仏因縁の法という。諸仏が因縁の法を覚って仏となった。それがわかれば仏となる。それがわからないから凡夫である。凡夫でいるけれども、その凡夫が成り立っているということが因縁なのです。そういう意味での不思議です。だから不思議というけれども、それが本当の意味の常識なのです。諸仏因縁の道理という智慧が本当の意味の常識です。これは専門家の知識とは違います。科学はやはり専門家の知識です。そんな専門家の知識ではなく、人間としての健康な意識です。靈験あらたかという意味での不思議ではありません。私たちの言う常識人は大変な事件が起こればあわて、何も起こらなければ有頂天になり喜んでいる。そういう私たちの常識が逆に非常識となるのです。私たちは思い通りになれば喜び、思い通りにならないれば悲しむ。起こった事実喜び悲しむということは、その出来事が実は因縁で起こったということをわかっていないのです。

私たちは宿業はよくわかると言う。仏さまの世界のことはわからないけど、我が身が宿業の身ですから宿業の方はよくわかっていと言う。しかし、そうではない。宿業の身そのものが仏の智慧の内容なのです。我が身というのが仏の智慧の内容なのであって、我が身ということは我々の知恵の内容ではありません。我々の知恵は、宿業の身でありながら宿業の身を全然見ない。宿業の身、そくばくの業を持っている身ということを全然見ない。なぜかということ宿業の身を嫌うでしょう。嫌だと思ふ。宿業の身に対して自己嫌悪があるのです。自分にあるものを嫌い、自分ないものを求めている。我が身に対する好き嫌いがあるわけです。だから宿業の身が見えないのです。好き嫌いという

意識です。これがあると我が身が見えないのです。宿業の身をもって流転する我が身を静かに体感できるということは、偉大な力なのです。我々はそれを見ずに逃げたいのです。だから、衆生は本当の常識をもっていないのです。主観的な好き嫌いで世界を見ている。宿業が人間を流転させているのではありません。主観的な好き嫌いで人間が迷っているのです。宿業で迷っているのではなく、好き嫌いで迷うのです。その宿業の身において大悲心が起るのです。大悲心の内容なのです。大悲心から見ると宿業の我が身が大切であるということです。いかに苦しくてもそれは大切である、と。それが一人あつて、二つとない我が身であり、他人に代わってもらふことのできない我が身であり、また、ふたたびこの身を持つことのできない我が身である、自分の身は非常に大切であるということです。

罪悪深重という、この身を捨ててしまいたいと考えるのだけれども、そうではない。罪悪深重の身が大切であるというのが大悲心です。流転するのなら、どこまでも流転していこう。それが宿業の流転する身に堪える力です。それが本当の意味の健康な常識なのです。このように平常であることが不思議なのです。当たり前だと思つていることが非常に深いのです。これが仏法不思議です。これは普通の不思議のように、知れば消えてしまうというものではなく、知れば知るほど不思議なのです。

今日は、「宗教」というものを考えます。それは一つの記号的言葉であつて表現的な言葉ではありません。「宗教」という言葉を記号的言葉という点から言えば、仏教は宗教であり、キリスト教も宗教であると言います。このような宗教という概念に対する一つの常識もありますが、その宗教概念を明らかにするのが宗教学です。宗教の学問も生きた宗教から学びとります。生きた宗教を材料にして宗教学が成り立つのです。生きた宗教ということになると歴史的宗教ということで、キリスト教は宗教学の材料になるのです。一般的に宗教というと、何か超越的なということに、「超越」ということが考えられているのではないかと思ひます。神と人間との関係という内容が、一般的に宗教という言葉の内容になっていますが、その場合、神は人間にはわからない超越的な観念です。そのわからないものと人間

との関係が宗教であると考えられています。一般的にそういう考えで仏教も考えているわけです。

超越という言葉は仏教にもあります。「横超」という言葉です。横超というのですから超越ということがないことはない。しかし、この横超という言葉の意味は人間の世界を超えているという意味ですが、実は、人間の世界の本来性を言う言葉なのです。横超という本来の世界は、外に超えているのではなく内に超えているのです。人間本来に帰るのが仏教です。人間を外に超えていこうとするものではなく、人間の本来性が仏なのです。我々は仏というものを根底として成り立っているのです。仏に帰命するということを通して我等は自己の本来に帰る。どこかにいつてしまふというものではないのです。浄土もそうです。浄土において本来の自己に帰る。あるいは本来の自己がそこに荘嚴されているのが浄土なのです。帰るといっても、本来の自己が浄土に荘嚴されている。

本来の自己は、『無量寿経』に「自然虚無の身、無極の体」と説かれています。これは言ってみれば自然の身体です。自然の身体というものは虚無、無極である。こういう言葉が『無量寿経』に出ているのです。このことばに親鸞は非常に深い感銘を持ったのです。それで、『教行信証』「証卷」に「大涅槃を証する」とある。「衆生をして大般涅槃を証せしめよ」という願が四十八願の中にあり、それを第十一願という。第十一願成就の経文が『無量寿経』下巻の一番初めにある。本願は『無量寿経』の上巻に出ているけれども、本願成就ということになると四十八願の成就をいちいち書いてあるわけではない。『無量寿経』は上下巻ある。上巻があまったから下巻になったのではなく、下巻は衆生の問題を明らかにしているのです。上巻の方は仏の問題を明らかにする。いかにして衆生を救うか、それが仏の問題です。下巻の方は衆生の問題。衆生はいかにして救われるかという問題です。救われるのは自分の問題、救うのは仏の問題です。その一番はじめが第十一願成就です。いま言いました「虚無の身」という言葉は、『無量寿経』では上巻のずっと後の方に出ている経文ですけれども、親鸞はこれをもって第十一願成就を補う、第十一願成就の精神をあらわしたお言葉であるのご覧になったのです。言葉を換えて言えば、成仏ということ。無上菩提を成就す

ると言つてよい。さらには、無上涅槃を証すると言つてもよい。これらはひとつのことなのですけれども、無上菩提の智慧によつて、無上涅槃を証するのです。証される方から言えば無上涅槃。証する方、覚る方から言えば無上菩提。無上涅槃とは何かといえは、さきほど言つた本来の自己に帰るという意味です。成仏とは、本来の自己に帰る。阿弥陀仏の本願を通して本来の自己に帰ることです。つまり言つてみれば、阿弥陀仏を通して無上仏になるのです。また、逆に言えば、その無上仏を莊嚴してあるのが阿弥陀仏です。我々は自分で本来の自分に帰れない。その本来の自分とは何かというと、自然の身体です。いまあるのは宿業の身体です。「そくばくの業をもちける身にてありけるを」というのは宿業の身体である。それを凡夫という。その宿業の凡夫の身のままで成仏はできない。宿業の凡夫の身に成つた、と言うことはできないのです。そういうことを言うから真言宗のようになる。それは即身成仏です。そうではなく、成仏とは身が変わるということ。宿業の身が無為自然の身に帰るということです。

自然の身。宿業も自然の身である。宿業の身は業道自然の身体です。これはやはり因縁ですから、普通に考えると無為自然の身体の方は仏法であり、宿業の身体の方は仏法ではないと考えます。しかし、そうではない。宿業の身体も無為自然の身体も仏法なのです。宿業の身の方は仏法ではないということではありません。両方とも仏法の内容なのです。『無量寿経』には「自然虚無の身、無極の体」と、かたがたがたといふと説いてある。そのかたがたがないものに、決まったかたがたを与えているのが宿業です。皆さん方、みんな違うでしょう。一人ひとり違ったかたがたで生きているということは宿業が与えているのです。自分の作つた宿業がそういうかたがたの自分を与えている。ところが、本来の自分は「自然虚無の身、無極の体」というかたがたがない身体であるということです。かたがたがない身体は無限のかたがたとれるということです。何もありません。特定のかたがたがないことは、どんなかたがたでもとれるという意味です。それを「無極」と言うのです。

我々の本来の面目というのは、いろいろかたがたもない「自然虚無の身、無極の体」という自分に帰るのが本来の面目

です。この本来の面目は、本来の面目と「考える」ことではない。虚無、無極と「考える」ことではありません。みなすべてかたがたがないとわかるのがかたがない世界です。だから、かたちのあるもので考えるしか仕方がないので。虚無、無極の身体とは、それとなってわかるものであって、ならずには本来わからないものなのです。ですから親鸞も「苦悩の旧里は捨てがたい」と言っているわけです。本来の自己は虚無、無極の身体であると聞いても懐かしくないと言っているのです。面白いですね。はやく無極の身体になりたいとは思わない、いつでもある身がかわいいと、親鸞は言っている。私たちは虚無、無極の身体になりたいとは思えないものなのです。なりたいたいと思つて虚無、無極の身体になるのではなく、その思いが消えるときに、「ちからなくしておわるとき」安楽浄土に帰る。虚無、無極の身体に帰るのだと言われます。消えてしまふのではなく、帰るのだと言うのです。そこが一番安らかなのであると。無限の宇宙的身体なのであると。無為自然の身体だから宿業の身にもなれる。この虚無、無極の身体というかたちのない世界を、本願によつてかたちをあらわしてあるのが安楽浄土です。虚無、無極の身体はいるもましまさずかたちもましまさずと親鸞は言っています。いろいろかたちもないものにかたちを与えてあるのが安楽浄土なのです。本願によつてかたちをとつたのです。だから、我々は本願を通して虚無の身体に帰されるのです。帰りたいと思つて帰るではありません。帰りたいと思うまいが本願によつて帰されるのです。そこに帰されるのだけれど、帰される世界は見えない。だから、本来の世界とはまだ見ぬ故郷なのです。親鸞も「真仏土巻」で、我々は初めて安楽浄土において自己自身を見るのだ、仏性を見るのだと言つた。この穢土においては煩惱に眼さえられて、見る事ができないのです。仏を見るのは、仏になつた時に見る。仏にならずに仏を見ることはできないのです。そこを混乱しないようにしなければなりません。

親鸞教学では成仏ということは必ず未来としてある。いまではない。「純粹未来の世界」と言うのです。そういう純粹未来の世界がかたちをとる、莊嚴されてある。成仏とは虚無自然に帰ると言うことですが、虚無自然に喚びかえ

すために、私は本願の浄土を莊嚴された。莊嚴するのは我々のためです。宿業の身を撰取せんがために浄土が莊嚴されている。だから、宿業の身をもって触れることができるのは純粹未来の世界がたちをとり、莊嚴された浄土なのです。往生決定するのはいまでもです。成仏するわけではないが、往生決定するのはいままのです。『無量寿經』には「即得往生」と説かれている。信の一念に往生が決定する。信心とは決定する心を信心というのです。決定していないのは信がないということなのです。信心決定とも言うし、あるいは安心決定ともいう。決定心です。決定しておるから金剛ということがある。金剛堅固の信心と言われます。今日の平凡な言葉で言う信心です。動く信心ということとは意味がない。動かないから信心です。また、動かないように気張ることも動いている証拠です。だから、我々の状態がどんな状態にあつても一喜一憂しない。驚かない。腹が据わつていて驚かないというわけではないのです。驚いても驚かないというところに帰っていくのです。初めから驚かない者は凡夫ではありません。驚くけれども、そのことによつて自己を失わない。初めから驚かないという意味ではない。驚くけれど、その驚いたほうに引きずられないということなのです。驚かないのではなく、いかに驚いても差支えがないということです。そういうものを持つことを信念と言う。警戒する必要がない。驚かないように普段から警戒する必要がないのです。驚くということが凡夫の証明なのです。何が来ても驚かないと空威張りしているわけではないのです。驚くから凡夫のだけけれども、凡夫であることは信念と矛盾しません。むしろ凡夫になつて信念を頂くのです。凡夫にならないから本願を頂くことができます。賢い人間が本願を頂くことはできないのです。愚癡無知な者がかえつて本願に触れる。そういう意味からみると、宿業の身が大事な意味を持つのです。宿業の身は本願に触れる場、本願に触れる身なのです。

人間は迷っていると嫌う、現実を嫌つて理想を描くのです。人間は理想主義になつていますね。だからそういう頭で考えると、浄土の話聞いても理想の世界だと考える。浄土は理想の世界ではなく、本来の世界です。これから我々が作る世界ではありません。帰れば開かれている世界なのです。南無阿弥陀仏の中に開かれている世界なのです。



南無阿弥陀仏と言うとわからないけど、南無の中に阿弥陀仏として開かれている世界です。本願を通して無為自然に帰る。逆に言えば、その無為自然の世界が本願で表されているということです。だから、本願の中に無為自然も開かれて、また、宿業の身も含まれている。どうにもならないというのが宿業の身で、我々はどうにもならない宿業の身をどうにかしようとする。その我々のわがままな根性が本願に叩き碎かれるのです。そして宿業の身に帰る。宿業の身に帰ればどうにもならない身のところに、どうする必要もない世界が開かれています。どうする必要もない程、絶対自由な世界が開かれています。絶対自由の徳を安楽浄土の本来の世界として莊嚴し、かたちをあらわしているわけです。

それで不可思議力とは、ことに「力」という字が入っていますね。ここに、仏土の不思議とある。仏法不思議の仏法とは根本的には南無阿弥陀仏です。南無阿弥陀仏は根本仏法というものです。この南無阿弥陀仏を離れば、阿弥陀仏も浄土も法蔵菩薩も全部が物語、昔話になる。『無量寿経』には昔話で説かれています。「乃往過去、久遠無量不可思議無央数劫」と説いてある。「乃往過去」とは大昔という意味で、昔むかしその昔ということですが、そこに法蔵比丘という人があつたと説いてある昔話なのです。今の人は神話というのでしょうか、昔話の形で説いてあります。

我々は昔話では腹はふくれませんがね。満足できない。「話」ということが悪いのではないのでしょうか、また、「話」であらわさねばあらわせないような世界を「話」であらわしてあるのでしょうか。しかし、歴史の中の世界を語るのなら物語でいいのだけれども、内面の世界、本能の底に隠れている世界というものをあらわす場合、歴史以前の世界をあらわす場合には神話という言葉を使うのです。しかし、何かを神話という形であらわす際には、あらわせるものが限定されている。だけれども、あらわされるものがなければあらわすわけにはいけません。あらわせるものがあるのです。それはどこにあるかという南無阿弥陀仏にある。南無阿弥陀仏の含む意味を物語の形であらわしている。南無阿弥陀仏は今現にある。今を離れて昔はない。昔という形で今をあらわしているのです。今あるものは名号、南無阿弥陀仏です。「今現在成仏」というでしょう。法蔵菩薩の本願が成就して、今ここに成り立っている

と。「今」「現」「在」「成」と力を入れてあるでしょう。昔々の大昔が今現にここに成就してある。我々の未来をそこで証明している、未来の成仏を証明しているのである。だから過去も未来もここにあるのだ。ここというのは南無阿彌陀仏です。南無阿彌陀仏をとってしまつと、ただの話になる。話が悪いのではない、南無阿彌陀仏を忘れることが悪いのです。南無阿彌陀仏を忘れると今度は話が実体になってくる。話が悪いのではなく、話を固定することが悪いのです。それだから、死んだ後に浄土があるとか、そこに阿彌陀仏がおられるとか、今我々が念仏を称えているその力でそこへ参らせてもらうのだとか、こういう考えになるのでしょう。すると話に引きずり回されていることになるわけです。ここに非神話化という問題があります。

現代のキリスト教の話ですが、哲学や神学の問題になるのです。非常に大事な問題としていろいろ議論されております。非神話化というと、なじみにくい言葉ですけども、言ってみれば神話を克服しようという意味でしょう。非神話というのはですから、神話の形で語られていた真理を神話でない形にして、現代人にもわかるような形に変えて、神話を克服しようという意味です。こういうことが考えられているのですが、いまでも神話というものに對して議論があるし、昔も阿彌陀仏の神話という言葉を野々村先生が使われた。そうしたら本願寺の宗学の人が皆腹を立てて、とうとう野々村先生は僧籍を剥奪されて龍谷大学を追われてしまった。曾我先生も僧籍は剥奪されていないけれど、大谷大学をやめさせられたのです。その曾我先生の場合でも神話という言葉に腹をたてられた。だから神話ということとは、誤解のある言葉でもあるわけです。野々村先生の場合は、はっきりと神話は「科学概念」だと言われた。科学とは悪いものだとか良いものだとか価値評価をしているものではない。「科学概念」であると言われたのです。記号概念であり、価値を表す概念ではないと言われた。神話を悪く言つたということでも何でもありません。一つの科学の概念であり、科学の記号のようなものだと言われたのです。こういうことは普通の人の常識感情からすればなかなか承知しないのです。「もつたないことを言う」ということになるのです。そして非神話化の議論がおこるのです。

ヤスパースなどが反対していることは、そういうことがあるのではないかと思います。神話は昔から大きな問題です。新しいものとしてはカッシーラーという人に、神話の哲学というものがあるが、もっと古いところから言えば、シェリングの積極哲学という最後の哲学は、神話の哲学です。そのように哲学でも神話の問題が大事に取り扱われています。

僕の考えはこういうことです。神話が悪いことではないのであり、神話の実体化が悪いのです。神話そのものが悪いのではないのであって、神話を実体化することが悪いのです。何か神話というと頼りないように思う。それだから実体化することになるのです。神話でも『無量寿経』の法蔵菩薩の物語には名号がある。名号を土台として神話を立てたのです。名号を離れなければ話に惑わされることにはない。話が話で領けるのです。「兆載永劫」という昔むかし、ということが名号においてそのままうなずける。名号を離れると、果してそんなことがあるかという議論になってくるでしょう。だから、名号に立ってみると、法蔵菩薩が生まれて出家して、本願をおこし、そして兆載永劫の修行をして阿弥陀仏に成ったという昔話ではない。南無阿弥陀仏に立ってみると、阿弥陀仏は南無阿弥陀仏から現れて本願を發すのです。そして南無阿弥陀仏して成仏するのである。本願をおこした瞬間に成仏するのです。本願をおこされたその時、阿弥陀仏は成仏する。今の南無阿弥陀仏で成仏する。南無阿弥陀仏から現れて本願をおこして、そしてその本願を成就して、今の南無阿弥陀仏となる。南無阿弥陀仏が南無阿弥陀仏自身を語ったのです。南無阿弥陀仏の自叙伝なのです。南無阿弥陀仏が自分の自叙伝を述べたのである。それが『無量寿経』ということですよ。南無阿弥陀仏に帰着することから言えば、それが本当の意味の非神話化です。その非神話化が教学なのです。

南無阿弥陀仏をもって、そこに本当に人間の救いを見出してやる。そのことが南無阿弥陀仏に立って教学が成り立つ唯一の場所であるのです。その南無阿弥陀仏を離れると教学が成り立たないのです。あちらやこちらのいろいろな知恵の学問、雑学論の知識で、教学を立てることを考えるのは、とんでもない間違いである。言ってみれば、いろいろ

ろな雑居的学問で教学を立てるといふ学問が必要なのではない。南無阿弥陀仏に立つからいろいろな学問が参考になるのであって、南無阿弥陀仏に立たなければ雑居的学問の中でミイラ取りがミイラになるのです。南無阿弥陀仏を離れば全部が空しい。そうでしょう。南無阿弥陀仏を「まこと」というのです。まこと、と。南無阿弥陀仏という如来なのです。真実なのです。『歎異抄』には「ただ念仏のみぞまことにておわします」と書いてあるでしょう。南無阿弥陀仏は「まこと」の実在なのです。まことにておわします。それに対して世間は「そらごとたわごと、まことあることな」し、と書いてあるでしょう。教学にしても教えにしても、念仏を離れたらまこととはないのです。自分も迷い人を惑わせるだけです。そのような教えは、行き先の見えない人に連れられて行くようなものです。どこに連れて行かれるかわからないのです。行き先の見えない人が人を導いて歩くことを考えるのと同じです。念仏すなわち南無阿弥陀仏。それが大地なのです。"Grund"という言葉がありますが、南無阿弥陀仏が教学の "Grund" である。

そこで、不思議力とは、安樂の至徳を示すのです。そして、仏土不思議は仏法不思議、仏法という意味での不思議です。『浄土論』に天親菩薩が述べておられる成就不可思議力の不可思議というのは、仏法の意味での不可思議です。仏法は南無阿弥陀仏ですね。南無阿弥陀仏の不思議をあらわされた。そこには本願の不思議もあるし、本願成就の光明の不思議もある。このことを「二種の不思議力まします」と書いてあります。この安樂の至徳という莊嚴された徳とは無為自然の徳です。無為自然の徳をあらわしてあるのが安樂浄土です。無為自然の徳とは本来の徳であり、我々に外から来る徳ではありません。本来備わっている徳という意味ですね。本来備わっている徳である。それがわからないから人工的に外に作ろうとする。我々は本来の徳がないのではなく、忘れておるのです。だから外に作ろう、描こうとするのです。そういうものが「文化」の本質です。本来の徳を忘れている為に人間の力で外に作ろうと考える。それが「文化」の本質です。

『浄土論』の願生偈の中に「備諸珍宝性 具足妙莊嚴」と言われています。「備」とは備えるということですね。人

間の珍宝の性を備える。「具足妙莊嚴」と、いかにも莊嚴を具足すると言われます。備とは具足ということである。つまり具備しているのです。外から与えたのではなく、具備しているということです。性として本来的に備わっている。外から与えられたものではなく、本来、備わっているものがある。本具なのだということです。本具の至徳というものがあつたということ浄土としてあらわしてあるのです。本具であるものが、本来、在るものが本願によつて浄土に成つたという形であらわされているのです。つまり、存在が成就されてあるのです。だから、安樂浄土へ往つて、もう一つ先に本来の世界を探する必要はないのです。安樂浄土に本来の世界が来ているのです。我々が阿弥陀仏に帰れば、阿弥陀仏の本願を通して自己に帰るといふのです。本願のところに自己に帰るといふ。本願の浄土が無為自然の浄土です。いまは安樂浄土において、次はもう一つ無為自然に生まれてと考える必要はない。安樂浄土に無為自然が莊嚴されておる。義をもつて区別すれば、阿弥陀仏の世界は帰命するのですけど、本来、無為自然の世界は帰入するのです。阿弥陀仏には帰命する。仏には帰命する。それによつて本来の自己に帰入するのです。

考えてみますと、そのような意味が不可思議力の中にあるのですが、「力」とは一体どういうことであるのか。「力」という概念は非常に複雑でして、いろいろな力が考えられるでしょう。「力」という言葉の中には、悪い意味では暴力もある。また、組織は力である。一人では駄目だからと言つて、皆が、大衆が、国が集めて組織を作る。さらに現代社会の力。社会的力。いろいろな力が考えられるけれども、この不可思議力という場合の力は能力です。一番いいのは自然に備わっている力ですね。無為自然に備わっている力。存在の力だね。それはどういふものかと言つと、地水火風ということがあります。地水火風、それからもう一つ、空というね。それから識という我々の心ですね。地水火風空識を六大と言つて、すべてに大という字がつくのです。空大、識大と。大とは法という意味です。ものではありません。地水火風というものがあるのではない。どのようなものでも地水火風空識でできているのです。地水火風というのが皆、法なのです。諸法です。いろいろなものを成立させる六つの法があるのです。それによつて一切

のものが成り立っているということです。

火について考えると、火は燃えるものですね。火をして火たらしめる性質には法がなければならぬ。火は我々が熱いという経験をしているのが火というものです。火にはろうそくの火もあるし、マッチの火もある。しかし、いろんな火があるけれども、全部火と言えるのはどういうわけであるのか。ローソクの火も、マッチの火もどうして火と言えるか。それは法でしょう。ローソクの火を火としている火という法がある。マッチの火を火としている火という法があるのです。法性があるのです。それを簡単に言うと、火というのはものなのです。事実なのですけれども、火をして火たらしめているのは「もの」ではない。「もの」をして「もの」たらしめるものが火の場合で言うと「熱さ」というものではないですか。「熱さ」が火をして火たらしめる。何か目の前で燃えているものを、なぜ火であるというかというのと、「熱さ」があるからです。その「熱さ」というものが法でしょう。法性です。ところがその「熱さ」があると言うけれども、「熱さ」は自然に人間が作ったものではなく、備わっているものですね。ところが人間が必要に応じて、状況に応じて火を用いるわけです。蠟燭を灯して、薪を燃やすなり、火を用いてものを焼くわけです。あるいは、灯火をとますのです。火に備わる熱さは自然の徳ですけれども、それを人間が用いると、焼くというはたらきをするのです。ものが焼けることで人間が満たされるわけです。自然の徳によって人間は自分の要求を満たすことができます。その満たさしめるものが「力」ではないですか。焼くというのは燃やす力もっている。つまりものを焼くのは火の能力ではないか。そういうことを功德というのではないですか。人間が人間の要求を満たすという意味で功德と言うのです。

ギリシアの神話では、火を見出したところから人間が始まる。火を見出した時から初めて人間が動物から独立したと言う。それほど火は人間にとって意味が深いものです。人間が見出したけど、人間が作ったのではない。見出したのである。人間が木と石とかちあわせて、そこに火が出てきた。かちあわせることが火でない、石に火になる一つの

性質があったのです。また、それはやはり人間がかわらなければ見つからなかった。そういう意味で功德という概念は、本来与えられているのだけれども、与えられていても見つけなければいけないのです。そういう意味で功德という概念は勝ち取ったもの、行によって勝ち取られたものという意味があるのです。後で段々話していきますが、『入出二門偈』では、浄土の歴史があらわされているのですが、ここに五念門が出ております。浄土に入出する門という意味を持つ五念門です。後から見ていきますけれども『浄土論』の解義分は五念門の行である。行にです。『願生偈』の解義分は五念門に始まって、最後は五功德門に終わっている。五念門は五念門の行である。行に始まり、最後は徳に終わっている。だから、その五念門の行によって勝ち取られたものが五功德です。行によって勝ち取られたものが功德です。行のものには願がある。願行によって勝ち取られたものが功德です。それによって願が自己を莊嚴する、それが浄土です。つまり功德とは行によって勝ち取られたものという意味があるのです。

そういう意味では功德には価値という意味があるのです。価値という概念は、やはり学問の概念です。学問以外で使う場合もあるけれども、学問の概念です。価値哲学という一つの哲学です。その価値哲学では何かというと真理に相對して価値を考えるが、そうではないのです。真理が価値なのです。真理は理論的価値なのです。ふつう人間は経済価値という場合、利益という。物々交換とか、交換価値とか、あるいは市場価値とか言います。言ってみれば経済学の価値ですね。だけれども、善や美というのは経済学ではない。美醜的価値ですね。さらに考えれば、宗教価値ということも考えられる。「聖なるもの」という、「神聖なるもの」というのは宗教的価値と言われる。その場合の価値というのがどのような概念かというと、存在に対する概念です。真理に対する概念です。無為自然ということも同じことを言っているのです。無為自然であると言うとき、自然に備わっておる価値であるという意味です。自然というだけでは価値にならないけれども、人間が行によって自然に見出され、自然の中から取り出されたもの、それが価値であるということです。価値という言葉で言い表すことで存在が莊嚴されるのです。存在から価値を見出し、価値に

よつて存在が莊嚴される。これで何か話のはつきりするでしょう。曾我先生は、最近、世間では盛んに我々には権利があると主張しているが、世間では権利というが、仏教ではそれを功德という、と言われる。これがいま話したことと同じ話になるわけです。

つまり、功德とは、人間の努力で見出したもので、見出してみたらあったもの、たまわったものであるということです。人間が努力で作ったものではない。努力を縁として本来あったものが見出された。本来あったものが表されている。それは努力で作ったものではないのであって、たまわったものということが言えるでしょう。それを忘れているから外に作ろうとするのです。内に帰ればそこにある。そういうものを力というのです。『浄土論』の偈文に「衆生の願樂するところ、一切能く満足する」と言われる。それを価値というのです。衆生の願樂、要求を満たすものを価値というのです。価値功德である。衆生の一切の要求を満たす、そこに価値というものがあるのです。その中に力ということがある。ここに「能」という字があります。

また『浄土論』の偈文に「観仏本願力 遇無空過者 能令速満足 功德大法海」とあります。国土莊嚴の次に、仏莊嚴が展開される。そこに仏の本願力というものが感じられるのです。やはり本願力でしよう。能く満足せしむ。人間の要求を満たし、仏の要求を満たす。ここに、一つの価値という、功德というものがある。功德は満足、満たすという意味で価値という意味をもつておる。この力というのは自然に備わっている能力です。それが人間を満たす。自然に備わっているもので、作ったものではなく、与えられたものです。我々は本来あったものに帰らないものだから外に価値を作ろうとするのです。作ったものではなく、与えられたものであると言っても、それは本当に作ったという意義が与えられるということです。作ったのではなく、与えられたのだということに本当に作るということがあ

るのです。

たとえば、画家が絵を描く、大工が家を造るといいますが、そうではないのでしよう。描く前に絵があり、造る前



に家があるのです。その本来ある家が造る者を動かして見える家として現れたのです。家の場合はそうです。彫刻の場合は木の中に仏様があつたのでしよう。彫刻家を作つたのではないのであつて、木の中に本来、仏様があつたのです。それを彫刻家がノミでいらなところを取つて、それで仏様が生まれた。作つたのではなく、生まれてくるのです。画家が描いた絵は駄作なのです。傑作ではない。そういうことから言えば、能く莊嚴したということは、作つた創造したというよりも、むしろ莊嚴したということのほうが純粹なものです。本当の意味のものが形を与えた。莊嚴こそ純粹な意味の創造です。創造という時には創るものと創られるものがあります。莊嚴という場合はそうではない。創るものなくして創られる。創るものがなく無為自然である。自然にたまわるのです。

このようなことが功德力です。このことから、浄土は無内容なものでないのです。功德が内容です。功德で充滿している。人間がそこに帰れば人間が満足するという。人間が満足し、仏も満足する。一切が満足するという意味は何かというと、南無阿弥陀仏に腹がふくれることではないですか。それ以上話はありません。南無阿弥陀仏に腹がふくれる。そこに生活があるでしょう。満足して生活する。満足というのはそういう意味ですね。満足して昼寝するのではありません。生きていることに満足する。満足しなければ生活はない。念仏においても、念仏の中に浄土がある。仏様がある。念仏は手段ではない。念仏を称えてそれを手段に浄土に生まれるのではないのです。念仏は手段ではなく目的なのです。我々は念仏を手段にしてはならないのです。我々が無条件に帰命する世界が南無阿弥陀仏。手段にはならないのです。念仏は目的自身なのです。南無阿弥陀仏のために南無阿弥陀仏に帰命するのです。南無阿弥陀仏に帰命するというのが南無阿弥陀仏でしょう。南無するというのが南無阿弥陀仏。目的自身なのです。何のためにといいことがない。救われるために南無阿弥陀仏するのではない。むしろ南無阿弥陀仏に帰命すれば救いを求める必要がないのです。人間はそこで救われなくても差し支えないところに着けるのです。要求するのではなく、南無阿弥陀仏に立つたら要求を撤回するのです。浄土に生まれないと死んでも死にきれないというようなものを

撤回できるのです。このままで差し支えないということです。それが現生不退でしょう。だから南無阿彌陀仏以外に浄土や仏を考えると、南無阿彌陀仏が手段になってしまう。そうではなく、目的なのだとするときには南無阿彌陀仏が仏なのです。南無阿彌陀仏が浄土なのです。そこに人間の絶対満足というものが与えられる、回向されているのだという意味ですね。

この「観仏本願力 遇無空過者 能令速満足 功德大法海」は何かというところ、南無阿彌陀仏に満足する世界をうたっているのです。これは南無阿彌陀仏に満足している人が書いたのです。不満だから願生して浄土に生まれるのではない。念仏に満足した世界を述べたものです。願生しても願生しても願生しきれないような純粹な願というものが述べてある。こういう関係ですね。

曇鸞大師は、仏国土の莊嚴功德は不可思議力を成就する、ということを解釈される時に、国土の体相ということ、観行体相と言われた。この体相とは曇鸞大師が解釈されたものです。体相というのは国土そのものです。体は無為自然を表す。相は莊嚴を表す。体はかたちがない。かたちがない体にかたちを与えたものを相という。そこに十七種莊嚴功德が考えられているのです。その十七種莊嚴功德の一々ということ以前に全体として述べる、というのが体相ということ。全体として考えてみると不思議という一語で尽きるところです。不思議力が成就されている世界ということで、浄土そのものが全体として尽くされる。体相というのは、そのものであるということです。そのものと言ったらね、無内容、実体がないという意味ではない。浄土は観念ではないのです。以前に金子先生の『浄土の観念』という本が出て大変に問題になりましたけれども。金子先生はカント哲学で浄土を解釈されたのです。カント哲学を使ったということがかえって問題になったのでしょうかね。

浄土そのものとは、浄土の観念という意味ではなく、浄土それ自体は内容があるということです。無内容な観念ではなく、自体という内容がある。しかし、内容があるといえはかたちがあがるのではないか、形式があるのではないか、

となりまますけれども、相の内容です。体は本具です。本具とか内容とかいうのは、いろいろ考え方があっても、内容に外からかたちをもってきたというのではなく、浄土といい、国土というのは、これはやはり願心莊嚴という、願心の莊嚴功德です。願心によって国土そのものが成り立っているという意味です。この願心の自性がかたちをとる。それによって願心自身が自分の内容を莊嚴した。莊嚴が願心の内容です。浄土というのは願心自身が自分自身を莊嚴したのです。それが浄土の内容です。願心が自己自身を自己によって証明した。体相という言葉は曇鸞大師が使っている。これは、浄土とは無内容ではなく、浄土とは願心、願心莊嚴という言葉を持っている、観念という無内容なものではない、ということが体相ということであらわされているのではないかと思うのです。

浄土の内容は功德なのです。功德ということが浄土の内容です。何もないのではなく、功德が満ち溢れた世界という意味がある。これが非常に大事なことでね。我々は、世界を見出して南無阿彌陀仏によって我々はそこに一心をたまわると、その一心が南無阿彌陀仏の中に世界を見出してくるのです。我々が世界をもつということです。南無阿彌陀仏がなかった場合は世界がなかった。孤独であった。それが世界を見出してくる。その世界は普通には見えない。普通、我々の世界とは社会が世界でしょう。社会という世界に我々は居るわけです。そこでいろいろな努力して満足をしようとしている。だから、普通は社会をもったことが救いではないのであり、救うようにしなければならぬのが社会でしょう。ところが仏法の世界はそうではない。世界を見出したことが救われたことであるのです。世界をもったことが救いです。世界をもたないのが救いがないということです。孤立しているのです。世界をもった、ということが人間が救われたということ。人間が独立したということです。そういう意味では世界観ということも、南無の世界観、南無に開かれた世界ですね。世界という言葉は同じだけれども、その意味ですね。南無の世界観、南無の生活ですね。南無の生活内容です。こういうことが言われるのではないかと思えます。

そこに二つの不思議力があるのです。一つには業力です。業力とは、「法蔵菩薩の大願業力」である。二つには業

力に対して善力と言う。「正覚の阿弥陀法王の善力」に撰持せられた。不思議力が業力と善力というこの二つの力で代表されると言うのです。業力と善力は、言ってみれば、浄土というものを生み出す力が法蔵菩薩の大願業力です。それから生み出された浄土を統一する力が正覚の阿弥陀法王の善力ですね。善住持力と言って、この「正覚阿弥陀法王善住持」という言葉が「願生偈」の国土莊嚴の中にあるのです。これを主功德というのです。主功德莊嚴に善住持力とある。つまり住職ですね。阿弥陀仏は浄土の住職なのです。阿弥陀仏が住職をしている世界という意味で「善住持」と言うのですね。

阿弥陀仏が浄土の法主なのです。これは阿弥陀仏の徳であって、人間を法主としないのです。南無阿弥陀仏の世界には人間を法主とする必要がない。法自身が法主である。法の主となる。南無阿弥陀仏の世界は、法自身が統治する。ダルマに統一された世界、ダルマの王国であるという意味です。

ここで非常に大事なことは、生み出す業力と統一する善住持力。住持する力ですね。これを撰持とも言います。撰持する力ですね。撰取し持する力です。それから成就する力。成就とはものを生み出す業力です。成就する力を業という。法蔵の大願業力というね。それが成就する力であるという。それから統一する力です。それが正覚の智慧でしょう。浄土は願によって生まれ、智慧によって統一されている世界です。少し説明が足りませんが、時間がないので今日はそこまでにしておきましょう。

(本稿は岐阜慈光会主催の『入出二門偈』の会における一九七六年十月一日午後の講義を筆録整理したものである。文責編集部)